無我の一考察

小島誠一

古來、無我は佛教思想の本質を示す一の重要な術語とみなされてきた。しかし、無我という語をバラモン思想におけるアートマンの存在否定をいみする語とのみ、單純に考えることは適切ではない。このことは中國語に無我と譯された語の原語をたずねるだけでも、容易にうなずかれる。[1]そこで、無我説は大きく三つにわけて理解できるように思う。第一は、わがもの mama という人間感情の否定をいみする無我説であり、第二は非我なるものを自我と誤解することの否定としての無我説、第三には、文字通りアートマンの存在否定をいみする無我説である。この第三の説は説一切有部や初期大乘經典には見られるものの、佛陀や最初期の佛教徒の間には見られない思想なのでこの小論では割愛します。以下、第二の無我説に重點をおいて、少しく考察してみたいと思います。

まず、第一の感情的なものに關する無我説とは『（何ものかを）わがものであると執着して動搖している人々を見よ。（かれらのありさまは）ひからびた流れの水の少い所にいる魚のようなものである。』[2]とか、『「これはわがものである」また「これは他人のものである」というような思いが何も存在しない人かれは（このような）わがものという觀念が存しないから、「われになし」といつて愁えることがない。』[3]などと説かれる場合の無我説である。このような意味における無我説は、ウパニシャッドにおけるアートマンの存在否定としての無我説ではなくして、所有欲という人間感情をすてさるべきことをいみする無我説に外ならない。つまり、アートマンが存在するか否かに關わるのではなく、およそ宗教的實踐にはげむ者に必要な無執着という心的態度を示すものである。次に、第二の非我なるものを自我と認識することの否定としての無我説とは、『見よ神々並びに世人は非我なるものを我と思いなし、名色に執着している。「これこそ眞理である」と考えている。』[4]とか『五蘊を（アートマンとは異つた）他のものとして見る。アートマンであるとは見ない。』[5]『諸行を（アートマンとは異つた）他のものであると見よ。苦であ

ると見よ。アートマンであると見ることなかれ。[6]』などと說かれる如く、非我なるものとしての五蘊卽ち、廣く意識の客觀として把捉される一切現象をアートマンと見なしてはならないと敎える無我說である。特に狹いいみの五蘊卽ち、私たちの精神をも含めた身體を自我と見なす考え方は、今日に至つても常識的に行われている理解ですが、このような誤解に對しては「自己の身體に執する見解」sakkāyadiṭṭhi として初期佛敎徒によつてきびしく否定されています。なぜなら、自我アートマンとはウパニシャッドにも『見られない見て、きかれない聞きて、思われない思いて、知られない知りて[7]』と示される如く、純粹に主體的なものですからそれは何らか意識の客觀として把捉されえないものだからです。このような非我なるもの（五蘊）を自我と認識することを拒否する無我說は、何らウパニシャッドにおいて主題となつたアートマン論を否定するものではありません。のみならず、佛陀自身も『私は過去の正覺者たちのたどつた古道古徑を發見したのである。そしてその道を私は步みゆくのだ。[8]』とか『アートマンを自己の島とせよ。自我が據り所となろう。[9]』とのべたと傳えられるように、初期佛敎は誤れる自我觀の否定こそすれ、ウパニシャッドと同樣正しい自我の認識を目ざしていたことが、他の古い資料からも伺われます。このような事情についてフロイド・ロスが『バラモン敎の思想と佛敎の敎說とには一貫した傳統の流れがみられ……最初期に於てはバラモン敎と佛敎との間には敎理の對立はみられない。……要するに佛敎はウパニシャッドと同樣その基本思想においては、インドの傳統をなんら逸脫したものではない[10]』とのべ、さらに中村博士も『原始佛敎聖典の古層には「無我」あるいは「アートマンは存在せず」という趣意を標傍している特別の術語あるいは文句は存在しない。[11]』『初期佛敎においてはアートマンを否認していないのみならず、アートマンを積極的に承認している。[12]』と論じていることも一の妥當な主張ということができましょう。ただし、初期佛敎のアートマン觀が古ウパニシャッドの所說と共通的とはいうものの、佛陀はアートマンの宇宙論的性格については積極的に肯定も否定もしなかつたことから見ると、アートマンを世界の支配者、萬物の司令、元首[13]とみなす如き考え方を果して是認したか否かには大きな疑問があることは留意すべきであろう。ともあれ、私たちはスッタニパータ、ダンマパダ、ニカーヤなどからアートマンは愛護さるべきものであり[14]、それは探求され[15]、遂に自己の主となるべきものである[16]と說くのを見出します。

では、初期佛敎において探求の目標とみなされたアートマンについて、どのような具體的見解がなされていたのでしょうか。この點についての解答はあまり明瞭とはいい難いようです。卽ち、アートマンについての若干の間接的說明はなさ

れてはいるものの、自我自體についての直接的ないわゆる形而上學的説明が殆んど見られません。ここに、私たちは初期佛教徒のアートマン觀が理論的に嚴密にはどのようなものであつたかを理解する上に、一の困難を感じないでいられません。このように、初期佛教徒がアートマンに關して極めて消極的態度をとつた理由について、つぎに一つの解釋をあげて少しく考察して見たいと思います。それは中村博士の『アートマンはアートマンならざるもの卽ち客體的なものとしてはこれを把捉することはできない。從つてそれについて「有り」とか「無し」とか陳述することは許されないのである。我そのものについては沈默を守り形而上學的考察を避けるのが初期佛教徒の根本的立場であつた。』[17]という解釋です。もとよりアートマンは『貴君は見る作らきの（主體たる）見てを見ることはできない。貴君は聞く作らきの（主體たる）聞きてを聞くことはできない。』[18]と説かれる如く、アートマンは行動や認識の主體である以上それ自身は意識の客觀として把捉されるものではなく、常に一切の客觀を把捉する側にのみ存在します。とすると、私たちはアートマンについては有無の陳述が不可能というのではなく、まず嚴密に一義的に『私たちに意識された世界（五蘊の世界）にはアートマンは存在しない（無い）』と判斷することができます。この判斷は『五蘊はアートマンではない』という判斷を單に言いかえたものといつてよいでしよう。なぜなら、五蘊は自我でないとすると五蘊という存在領域には自我は存在しないことになるからです。次に私たちは『アートマンは認識主體として實在する（有る）』と判斷することができます。勿論、自我は具體的な現象存在として把捉することは不可能ですが、現に判斷し情感し意志する主體として働いている實在であることの事實は疑うことができません。しかし、ここには意識の客體として把捉されえない自我についていかにして『自我は認識主體として實在する』と確言しうるのかという認識論的問題がひそんでいます。卽ち、認識主體はいかにして把捉されるかということは哲學的にも最も困難な問題ですので、結論のみをのべますと『アートマンによつてアートマンに沒入した』[19]とも記述されますように、自我が自我自身において自らを自覺的に把捉するという自覺體驗において把捉されるのです。このような自我把捉こそ禪においても修行の究極の目標と見なす所と考えられると共に、自我が自我自らにおいて直接的に自己を把捉する體驗である故に、それは最も確實な自我存在の把捉であると言うことができます。

このように、自我についてはそれが客體的なものとして把捉されない故に有無の判斷が不可能となり、沈默を餘儀なくされるというのではなく、『五蘊の世界には自我は無く、認識主體として自我は有る』と一義的判斷が可能と思います。

以上、無我ということに關連して、自我についての最も基本的判斷である有無の判斷づけの可能性について私見を略述しました。

無我という術語には佛教の歴史と共にその意味内容に幾多の變遷がみられ、時代によつてそのニュアンスを異にし、最初期には見られなかつた我の存在否定をいみする無我說すらやがて現れ、無我は無自性と意味擴張されるなど、他派から佛教を目して nairātmyavāda とよばれるまでに無我說は固定化していつた反面、認識主體を意味する如き術語として、有情、相續、プドガラ、果報識、窮生死蘊などが用いられ、更に大般涅槃經には、我とは如來藏の義であり、一切衆生は悉く佛性をもち、これが我の義であるといういみのことが示され[20]、大乘莊嚴經論には『諸佛は淸淨なる我をえたる故にその我は大我性に達した[21]』とのべられるなど、我または大我の思想として發展していつた自我思想の系譜も、最初期の佛教における自我思想の發現と見てよいでしよう。同時にそれはまた認識主體としての自我存在の體驗的確信に支えられてのみ成立しえた思想系譜といつてよいでしよう。

1 中村元編「自我と無我」三頁—四頁
2 Sutta-nipāta 777
3 ibid. 951
4 ibid. 756
5 Therag. 1160
6 ibid. 1161
7 Bṛhad. Up., III 7. 23.
8 SN., II. 106
8 DN., II 101
10 フロイド・ロス著古田紹欽・増原良彥譯「佛教とインド思想」一〇二頁—一〇四頁
11 中村元編「自我と無我」五六頁
12 ibid. p. 28.
13 Bṛhad. Up., IV. 4. 22.
14 Dhp. 157.
15 Vinaya. Mahāvagga I. 13.
16 Dhp. 160.
17 中村元編「自我と無我」五十五頁
18 Bṛhad. Up., III. 4. 2.
19 Vājasaneyi Saṁhitā XXXII 4. 5.
20 大般涅槃經　北本如來性品
21 Mahāyāna-Sūtrālaṁkāra IX. 23.